



古事記

天地の初発のとき

— 実在 — (六)

反省的方法

— 存在論、アリストテレス(2) —

竹葉 秀雄

第 53 号

月 1 回 発行

ひの心を継ぐ会

〒799-1336

住所: 愛媛県西条市

上市甲 720-1

TEL: 080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

アリストテレスは物を認識するは其物の始源を知ることであると考へた。哲学は存在の始源としての原理を知ることと目的とする。始源はそれから其物の生ずる原因であり論理的には理由である。論理的存在論の立場に於ては理由(原理)と原因とは一つである。アリストテレスは原因に資料因 *causa materialis* 形相因 *formalis* 動力因 *efficientis* 目的因 *finalis* の四つを区別した。これは芸術的表象の立場から存在を彫塑的に観照する希臘的存在論の典型的なる表現である。物の底に存在の隠されたる原理を認めず、凡て顕わなる原理に由つて生ずるとなすものである。彫刻家がアポロの像を造る時には、其質料たる大理石とか青銅とかがなければならぬ。これが質料因である。それに対して造らるべきアポロの形姿形相が予め彫刻家の脳裏にあるのでなければ彫像の制作は出来ぬ。それが形相因である。而して此形相を質料に於て実現する芸術家の活動が動力因であり、其制作の目的とする所が目的因である。凡ての存在は此の四種の原因に由つて生ずる。併し人工物では此の四種が夫夫別のものとして区別せられるが、自然物に於ては形相因と

目的因とは一致し、質料の実現すべき本質に帰する。ところで質料はそれ自身では不定のものであるからそれに就いて語ることが出来ぬ。然るに存在はロゴスに於て論理的に捉えらるるものである以上、それに就いて語りそれに定義を与え得るものでなければならぬ。従つて形相(本質)が眞の存在であるとする。実体も原因の見地から観る時、個体の本質(形相)に帰するといわねばならぬ。それでは質料と存在とは如何なる関係にあるか。此二つが若し単に離れ存するならば個物は存在することが出来ぬ。アリストテレスがプラトンのイデアの離在を攻撃したことは既に前に述べた所である。彼自身は内在の立場から形相と質料とを現勢と潜勢との関係に於て考へ、質料は形相になり得べくして未だ形相とならぬもの(可能性)、形相は即ち其実現(現実性)であるとした。本質を単に可能の状態に含むのが質料であり、それを形相に実現するのが潜勢から現勢に転ずる運動である。一般に潜勢から現勢に転ずることを運動という。運動は単に継起する状態のみで成立するものでない。運動には変化する状態の基底に不変なるもの(基底)が無ければならぬ。運動に先だつて運動の実現する本質が基底として存し(是即天之御中主神の世界)、それが潜勢から現勢に自己を実現するのである。(高御産巢日、神産巢日、二神の結び蒸力の作用によつて)。其故現勢は潜勢の後に現れるのでなくて却て潜勢に先立ち、其完成せる本質が運動に於て自己の姿を現わすといふべきである。即ち現勢は完成の意味を有する。現勢には動く方面と共に動かぬ方面が無ければならぬ。其不動の完成態は始より潜勢の中にあり、潜勢が現勢になるのは此完成態が目的となるから、質料の潜勢が形相の現勢に転ずるのは本質が自己自身にならんとして自己自身に向う運動をなすもの

といわれる。此処にアリストテレスの思想の特色たる目的論が成立つ。(成りいずる神であり、造られたものでなく神・本質自らの自己の顕現である。神道の成生の相である)

農士道

第五章 農士論

第二節 帰農的安立

菅原 兵治

茶柄杓の心得

「翁又曰、茶帥利休が歌に『寒熱の地獄に通う茶柄杓も、心なければ苦みもなし』と云えり。此歌未だ盡さず、如何となれば、其心無心を尊ぶといえども、人は無心なるのみにては、国家の用をなさず。夫れ心とは我心の事なり。只我を去りしのみにては未だ足らず、我を去りて其上に一心を決定し毫末も心を動さざるに至らざれば尊ぶにたらず。故に我常に云う、此歌未だ盡さずと。今試みに詠み直さば『茶柄杓の様に心を定めなば、湯水の中も苦みはなし』とせば可ならんか。夫れ人は一心に決定し動かざるを尊ぶなり。夫れ富貴安楽を好み貧賤勤勞を厭うは、凡情の常なり。髻嫁たる者、養家に居るは、夏火宅に居るが如く、冬寒野に出ずるが如く、又実家に来る時は、夏氷室に入るが如く、冬火宅に寄るが如き思いなるものなり。此時其身に天命ある事を辨え、天命の安ずべき理を悟り、養家は我家なりと決定して、心動かざる事、不動尊の像の如く、猛火背を焼くといえども動かじと決し、養家の為に心力を盡す時は、実家へ来らんとするとも其暇あらざるべし。斯くの如く励む時は心力勤勞も苦にはならぬ物なり、是只我を去ると、一心の覚悟決定の徹底とにあり。夫れ農夫の暑寒に田畑を耕し、風雨に山野を奔走する、車力の車を押し米搗きの米を搗くが如き、他の慈眼を以て見る時は、其勤苦云べからず。氣の毒なりといえども、其身に於ては兼て決定して、労働に安んずるなれば、苦には思わぬなり。武士の戦場に出て野にふし山にふし、君の馬前に命を捨てるも、一心決定すればこそ、出来るなれ。されば人は天命を辨え、天命に安んじ、我を去て一心決定して、動かざるを尊しとす。」

要するにかくの如く明暗苦樂の両者が併存して渦まく処に吾等人間の現実がある。吾々は此の人生の現実に直面して、之を突破して「驀直去」するの志操、勇奮を有たねばならぬ。「大事到来す、如何か迴避せん」とたじろいだり、苦を怯れて観念の世界や、耽美の世界に「志」を麻痺せしめて、獨りよがりの甘美の酒に陶醉している事は、断じて「士」たる者の取るべき勇風ではない。

自治集団農部会第一回会合

三浦 夏南

八月十日に自治集団の農部会がむすびの里にて開かれました。農部会が今後どのような事業を具体的にに行っていくのかを話し合いました。我々がたたき台となる案を提出した上でそれを基に色々意見を出し合い、一つ事業の形が見えて来ました。

具体的には新たな農士を育成する研修プログラムをむすびの里にて行い、そこで数年間育てた青年を、有志の経営者のいる地域に就農させます。育てた農士の経済面は法人が負担する代わりに、農士はそこで市場原理を無視した理想的農業を行い、そこで取れた作物を法人に還元、備蓄するとともに、その田畑がそのまま法人の農的体験活動、社員研修の場になるというものです。これならば農家がお金のことを考えず、あるべき農業に専念することが出来、且つ会社で働いている人々にも農的生活の重要性を実感させ、来たるべき自治社会への移行への準備とすることが出来ます。我々はむすびの里での育成事業での教育の一端を担うとともに、市場原理を無視した完全自立循環型の農を開発することが仕事です。これをもし実現させることが出来れば、我々が目指して来た農士学校、三間村塾が現実的に形になってくるかもしれません。

この事業を大々的にやっていく前に、プログラムをしっかりと固めて行くには、まずは少人数から実際に育ててみて、そこで出た問題点を修正しながら、形していくしかありません。そこを卒業した後に、法人お抱え農家になった後の活動も前例がないだけに手探りになります。この最初に飛び込む青年の抜擢と育成がプロジェクト成功の鍵になりそうです。二十代で年も若く大変優秀な青年が一人いるので、その青年を九月の推薦会にて推薦し、自治集団の青年農士第一号になってもらえたらと思っています。まだ何も形になっていない時に飛び込むことは大変勇気のあることですが、同時にまだ何も形になっていないので、自分たちで作って行くのだという夢と希望があります。また名誉があります。我々としては是非頑張りたいと願っています。

今回の部会で農部会の活動が明確になってきたので、他部会との連絡もとりながら、理想的農の再生と青年農士の育成を形にしていきたいと思えます。我々だけでは夢や理想で終わっていたことも、多くの人の知恵と力が合わされば現実のものにすることが出来ます。我々も自治を現実のものに出来るよう、全力で自治集団に貢献していきたいと思えます。

小野鶴山の『大学師説』①

庄 宏樹

今年七月二十八日、崎門学研究会の折本龍則代表とともに、早稲田大学のほど近くにある済松寺を訪問した。同寺には、山口菅山という江戸時代の学者の墓があることで知られる。菅山は、山崎闇齋―浅見綱齋―若林強齋とつづく崎門学の系譜上に位置する人物であり、幕末の梅田雲浜や有馬新七といった志士たちも、彼のもとで学んでいたという。

また、菅山の墓のすぐそばには、「若林氏弘室之墓」と刻された墓石がたっており、その裏面には「若林氏、初称止波、強斎先生之女、鶴山小野先生之室也」と誌されている。小野鶴山は若林強斎の門人であり、強斎没後の望楠軒講主である。鶴山は後に若狭小浜藩へ仕えることになるのだが、その小浜藩の江戸藩邸が済松寺の近くにあったため、鶴山の妻である弘室も同寺に葬られたのであろう。

なお、鶴山と弘室の間には一男四女があり、その季女（末娘）が山口家に嫁ぎ、菅山を生んでいる。つまり鶴山は、菅山の母方の祖父にあたるわけである。さて本稿では、この小野鶴山による『大学』講義録である『大学師説』の内容を紹介していくことにする。同書は、神奈川県横浜市にある「大倉精神文化研究所」の服部文庫に所蔵されている。服部文庫は、名古屋出身の漢学者・服部富三郎氏の旧蔵書であり、尾張崎門学派の文献が多く収められている（阿部隆一「崎門学派著作文献解題」）。

では、そもそも『大学』とは如何なる書であるのか。朱子によれば、『大学』は孔子の言葉を弟子である曾子が述べたものであり、いわゆる「四書」のうちの一冊であるが、同じ四書でも『論語』『孟子』より先に読むべきなのが、この『大学』である（『大学或問』）。



『論語』に関しては、現代日本でも未だに根強い人気があるが、『大学』にまで手を伸ばす人はそれほど多くないだろう。正直に言え

ば、私も『大学』について、これまで深く研究してきたわけではない。従って本稿にも多くの誤りが見受けられるだろうと思う。読まれた方の叱正を乞う次第である。

さて、『大学』を読むにあたって理解しておく必要があるのが、朱子学という「本然の性」と「氣質の性」との違いである。「本然の性」について、小野鶴山は次のように述べる。

「人の生れつくだいたいから云へば、親は愛し、子はかはゆし、目は明にみえる、耳は明に聞へる。自然のなりから云へば、いみじふ生れついでをらぬものない。それをば本然と云」

どんな人間であっても、またいつの時代も、子供は親を愛おしく思い、親は子供を可愛がるものであり、それが人間の本来の姿である、というわけである。だが、このように言えば、現代人からは多くの反論がかえってくるだろうことが予想される。「そうは言っても、新聞等を見れば、親が子を虐待するなどの悲惨な事件が日々起こっているではないか」と。

むしろ、鶴山もそのような現実を否定するわけではない。

「其自然の生れつきなりにすいとゆけば、何も手のつくことない。然れども、今日人のなりがそふかと思へば、親子は親ふなし、兄弟は友愛なし、目にみる処は筋目の様になく、耳に聞く処は是非わかれぬと云様に、本然のなりがわづらふてをるぞ」

では、そうした現実における様々な悪を、朱子学ではどのように説明するのだろうか。次回は、この「悪の起源」という問題について検討したい。



とよくも農園だより

三浦 美恵

うだるような暑さが続いた八月。今月も自給自足に向けて大きく前進してきました。

まず、内子町にある中谷自然農園を訪問しました。そちらの鶏は平飼いで、草やお米を食べて育っています。現在の日本での一般的な鶏の育て方よりも資材、必要面積、経費を考えた時には随分と効率がおちますが、鶏がストレスを感じにくく、のびのびと小屋で育つことができます。頂いた卵はすっきりとしていて、ほのかに甘みがありました。鶏は比較的飼いやすく、農閑期にあたる十一月から二月に鶏小屋を建設する予定です。

次に馬耕を知るために、鳥取県の智頭にある「森のうまごや」を訪問しました。運営主の岩田さんは県外から移住して来られ、実際に自分達の食べるお米の田んぼを馬で耕して育てておられました。調教中の様子を見せて頂いたり、馬の購入先や相場、また調教の期間等お聞きしたりしました。直近では難しいですが、将来的に取り入れていきたい農業の在り方だと感じました。

続いて高知の「山塩小僧」を訪問しました。こちらでは、手間のかかる昔ながらの天日塩を作っておられ、少し舐めさせて頂くと、市販のものとの違いは歴然。「手塩にかける」という言葉の通り、昔から塩づくりは大変だったそうですが、生きていく上でも非常に重要度の高いお塩。米、水に次いで毎朝神棚にお供えしているお塩はぜひ作りたいもの。思いから、これも今冬に塩用のビニールハウスを建設し、来年からは手作りの塩をお供えできるよう頑張りたいと思います。



お米も随分と大きくなり、あつという間に出穂し、その穂も垂れてきました。来月には初めての稲刈りに挑戦する予定です。大豆もこの一カ月でぐっと生長し、力強さを感じます。農作業をする上でしんどい事の多い夏もあと少しとなりました。アスパラガスの日々の収穫・出荷調整も、夏の終わりとともに減っていきます。この二カ月で多くの自給自足研究を進めることが出来たので、秋からはいよいよ本番です。秋野菜の播種や、自給自足のための畑準備、鶏小屋と塩ハウスの建設に向けて動き出していきます。今までは少しづつ形を変えながら、これからも新たな挑戦をしていこうと思っています。

★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせていただきます。ご希望の方は事務局までお電話ください。

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれました。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を灯し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

- 一般会員 三千元
- 賛助会員 一万元
- 特別賛助会員 三万円
- 支援会員 一万元

